

日常診療にどう活かす !?

『高血圧管理・治療ガイドライン 2025』

高血圧は、脳卒中、心筋梗塞、心不全、大動脈解離など重篤な循環器疾患の発症リスクのみならず、慢性腎臓病や認知症など加齢にかかわる慢性疾患の進展リスクになることは広く知られています。また、これまでの数多くの臨床研究により、降圧によりこれらの疾患のリスクが低下することが証明されています。しかし、わが国の高血圧人口 4,300 万人のうち、血圧が良好にコントロールされている者の割合は 27%に過ぎません。さらに、わが国で家庭血圧を指針にした血圧コントロールが推奨されて久しくなりますが、早朝家庭血圧が 130/80 mmHg 未満にコントロールされている者の割合は、わずか 30%未満です。これが、わが国の高血圧診療の愕然とする現状です。この現状を受け、日本高血圧学会では、「血圧朝活」キャンペーンを開始しました。

高血圧は症状がなく、血圧が高いという現象で診断されることから軽く考えられがちです。しかし、その背景には血圧を上げる様々な要因があり、臓器障害から血圧変動のリスクも個々の患者で様々です。この患者の個別性に対応した最適化診療を行わない限り、長期にわたる安定した血圧コントロールの達成は難しいと考えます。

この度、2025 年に 6 年ぶりに日本高血圧学会が『高血圧管理・治療ガイドライン 2025』を発表しました。このガイドラインは日本高血圧学会の英知を結集したガイドラインといっても過言ではありません。今後、ガイドラインの内容をいかに日常診療に浸透させ、多様な高血圧患者の個別最適化診療に活かしていくかが肝です。

本特集では、新しいガイドラインの執筆者を中心に各領域のご専門の先生方に、高血圧の診療に最も役立つ最新情報をまとめていただきました。著者の先生方には、各項目の冒頭に「伝えたいメッセージ」として、ご自身が最も伝えたいメッセージを箇条書きで記していただき、また項目の末尾には「私のとおき患者説明フレーズ」として、患者説明の場面で役立つフレーズをご紹介いただきました。これまでにない、血圧徹底コントロールに向けた新たな高血圧マネジメントを実装する試みです！

読者の先生方には、この強いメッセージを受け取っていただき、明日からの高血圧診療を革新していただくことを祈念いたします。

自治医科大学内科学講座循環器内科学部門
荻尾七臣